

多言語対応・ICT化推進フォーラム

～基調講演「外国人の生の声！ これから取り組んで欲しい多言語対応」～

講師：セイン・カミュ氏（Thane Camus）テレビタレント

2020年オリンピック・パラリンピック大会に向けた多言語対応協議会は、様々な分野における多言語対応の取組事例を広く共有・発信するために「多言語対応・ICT化推進フォーラム」を12月20日に開催しました。

基調講演では、ニューヨーク生まれで現在は日本で外国人タレントとして活躍する、セイン・カミュ氏が登壇し、広く海外を見てきた自身の経験やエピソードを交え、日本の外国語教育について感じていることについて話されました。

日本の多言語対応についてセイン氏は、電車の中や空港でのアナウンスなどにも外国語が増え、以前と比べてかなり良くなったと感じるものの「人と人のコミュニケーションの部分が欠けている」と言います。グローバルな人材育成に向け英語教育を推進する、東京都英語教育戦略会議の平成25・26年度委員にも選ばれたことのあるセイン氏は、「海外には小学校から英語教育を始めている事例がいくつもあるのに」と、中学校から英語教育が始まることにも疑問を投げかけ、日本人は「英語教育が悪い」「島国だから」と英語を話せない理由ばかりを言いすぎると嘆きます。

来年から、明日から、今から、国を挙げて英語に取り組もうとしても、残念ながら東京2020大会には間に合わないでしょう、と日本の現状について厳しい意見を述べながら、できることは「ある」とも言います。例えばボディランゲージです。セイン氏自身は、たとえ言葉が通じない国に行ったとしても、ボディランゲージで最低限のコミュニケーションはできると話しました。「体はツール、言葉もツール。いかに上手くツールを使うかが重要」と大きな身振り手振りを入れながら話しました。

さらにもう一つのツールとしてセイン氏は、50以上の言語に対応する「音声翻訳機」の利用も勧めました。しかし、「音声翻訳機に頼り切ってはいけない」とも言います。「素晴らしい機器であり使うべきものではあるけれども、人と人の気持ちのコミュニケーションを機械は越えられないと思う」「あくまでツールとして、上手に利用すべき」と、機械に頼り過ぎないことを呼びかけました。

またセイン氏は、平成30年度の訪日外国人推計が3,000万人を超えていることをあげ、英語が母国語の外国人ばかりが日本を訪れているのではないと話します。「国によって発音にも特徴があり、日本人も上手な発音で話そうとしなくて大丈夫。“失敗は成功のもと”の精神で、“ナイス・トゥー・ミーティング”。ジャパニーズイングリッシュでも自信を持って。人と人は心のコミュニケーションが大事」と心と心の繋がりの大事さを繰り返し話されました。

最後の質疑応答では、「多言語を学ぶコツについて」という会場からの質問に、繰り返すことと関連付けて覚える事、という方法をアドバイスしました。31ヶ国語の「ありがとう」を話せるというセイン氏は、例としてトルコ語の「ありがとう」“Tesekkurler (テシエキュレル)”は、ティッシュくれたら嬉しいよね、だから“ティッシュくれる”。ネパール語の「ありがとう」“Dhanyabaad (ダンニャバードウ)”は、“どんなトリ”と覚えた、笑いを交えて話されました。

セイン氏は、「外国語は話せないよりは、話せた方がいいですね。自信を持って頑張りましょう」と応援の言葉で講演を締めくくりました。



(平成30年作成)